

4 夫のユニークな子育て論

晋一。一九五一年（昭和二十六年）生まれ。
高校の理科教員。



冬の星座

金星と木星が大接近していた。

天気がよくて、天が高いのがはっきり

わかった。

うれしくて手をたたいた。

翌日は雨だった。



幸福

家族四人で家の二階の南側の窓から外を見る。

うららかな昼さがり。シーンと静まりかえった空を、時おり鳥が横切つて行く。坂の一番上の家なので見晴らしがいい。

「なんだか、ホッとするね」

と、夫が言う。

「まるで、つげ義春さんのマンガの中にいるようだね」

と、私が言う。

娘たちは夫の手と私の手を握りしめて、じっとしている。連休だということに、どこにも行かない。

ささやかな幸福。

つげさんの家でも、みんな外を眺めているのだろうか。

この静かな幸せが、ずっと続くといいと思う。

(一九八七年五月三日記)



勉強

「勉強って、とても幅広いものだ。ただ机の前に座ってするのが、勉強と
は限らない」

夫は子どもたちの勉強について、だいぶ意見がある。いつも私と議論に
なる。しかし、夫の意見は世間から見ると、だいぶずれているようだ。こ
んなふうである。

「子どもは遊びから多くのことを学ぶ。ドリルをやらせるだけが勉強では

ない。学校でやっていることと同じ勉強を、家でさせるのは間違いだ。そんなことをすると、子どもは学校の先生を信頼しなくなってしまう。それは先生にとっても、生徒にとっても不幸なことだ。

子どもにとっては、教える先生が二人いてはいけない。二人の人に教わった子どもは二種類の真実の前で迷ってしまい、どちらの大人も信頼しなくなってしまう。家庭で教えることと、学校で教えることは違ったものではないと。学校では『よく学び』、家庭では『よく遊べ』」

「フランス文学者の渡辺一夫が、『ほんとうの教育者はと問われて』で、学ぼうとする心のある人の前に素晴らしい人が現れてくるのであって、そういう気持ちのないところでは、どのような試みも実を結ばないと言っていた。大事なことは勉強を続ける意欲だよ。意欲を育てるのは、難しい。親自身でさえ、必ずしも勉強を続けているとは、限らない。

また、一生懸命に手足を使うことも勉強だ。手足の運動は脳を作るはずだからね」

「この成績は、子どもにとっては良すぎるよ。コップに無理にお湯を注げばあふれるし、あふれるぐらいいだったらいけれど、割れてしまったら困るだろう。高校生ぐらいになって、取り返しがつかない例がたくさんあるんだ」

どの親も、子どもをのびのびと育てたいと思っている。

子どもは、遊べと言わなくても遊びを考え出す天才だ。

しかし、小学校三年生ともなると、一日のうち、学校にいる時間は九時間近くにもなる。親と顔を合わせるのは、朝夕の食事の時だけだ。学校での教師の指導力が問われる。学校の勉強は教師に任せておいて、よいのだろうか。一クラスに四十三人もいるのに。

娘たちは、今日も絵を描き、それを切りぬき、ペープサートで、『やまたい国の女王ヒミコ物語』をやったり、嘘のお金をたくさん作って『質屋さんごっこ』をしたりして、いくらでも遊び続けている。



猫が空を飛んだ

新婚生活は喧嘩で明け暮れた。喧嘩の原因はいつも、決まっていた。親、兄弟、姓など。くだらないことで、延々と喧嘩が続いた。夜中の二時ごろまで続くこともあった。娘が生まれると、ますます喧嘩は激しくなった。

ある日のこと、猫が、喧嘩中とは知らずに、私の膝に甘えて来た。私は猫を夫めがけて投げつけた。猫が空を飛んだ！

この日以降、喧嘩は減った。二人とも仕事が忙しくなると、喧嘩の時間がもつたないからだ。

大きくなった娘たちは、私たちの喧嘩をしっかり覚えていた。

私は喧嘩をしたことを恥じている。喧嘩をして一つもいいことはなかつ

た。

相手を喧嘩では理解できない。相手も喧嘩では理解してくれない。

(一九九九年記)



父親の役目

新宿から小田急線の最終電車に乗る。

ラッシュアワーだ。乗客のほとんどが、男性サラリーマンだ。みんなくたびれている。アタツシユケースを抱え、新聞や週刊誌を持って居眠りをしている。この人々に「子育てに参加しましょう」と呼びかけても無理だ。だが、三百六十五日のうち何日かは、ゆとりの時間をつくらう。家族のためにも、自分のためにも。

昔、おやじはみんな頑固者だった。

「嘘をつくな」「返事は、はっきりと」「挨拶をしろ」「他人に迷惑をかけるな」。教育や教養はなかったが、主張があった。どの家も貧しかったが、おやじの頑固な主張が子どもを育てていた。

今は、どうだろう。父親に頑固な主張はあるだろうか。

厚生省は、歌手の安室奈美恵さんの夫で、ダンサーのサムさんと息子を使って、ポスターを作った。キャッチコピーは『育児をしない男を、父とは呼ばない』だ。お役所仕事にしては、強烈なメッセージだ。

受けとめ方は、いろいろだ。しかし、勘違いをしてはいけない。型破りのこのポスターは、父親に「オムツの交換をせよ」「ミルクを飲ませろ」と言っているのではない。

父親には「重要な相談」をしよう。

子どもの進学や塾、お稽古をどうするか。近所づきあい、親戚や祖父母と、どのように接するか。

「重要な相談」から逃げてはいけない。真剣に向き合って答える、それが父親の子育て、それが父親の役目だ。

父親の答えは、たいがい当たっている。なぜならば、家庭を客観的に見ているので、子育てにドブプリつかって自分の子どもしか見えなくなっている母親より、ずっとすぐれた意見が言えるからだ。

父親は自信を持つ。賢い母親は、必ずその意見に従う。それは、母親が見失った正しい意見だからだ。

(一九九九年記)



夫はこんな人

「若いころ、『女優の樹木希林さんに似ている』って言われたことがあつ

たわ」

と言うと、夫は意外な返事をした。

「それは、よかったですね。有名な女優さんに似ているなんて、素敵なおとです」

(一九九九年記)



古いTV番組

暦実から、誕生日のプレゼントにモンキーズのCDをもらった。

私が高校生の時、大流行をしたモンキーズ。テレビの『ザ・モンキーズ』という番組は、高校生ならどの子も見っていた。デイビー・ジョーンズの『デイドリーム・ビリーバー』が懐かしかった。

「デイビー・ジョーンズは、かわいかったわね」

と夫に言うと、思いがけない返事をした。

「山形では、放送していなかったよ」と。

* * *

「『ララミー牧場』は主題歌がよかったわねえ」

と言うと、

「山形では放送していなくて、修学旅行で東京に出てきた時、風呂屋のテレビで初めて見た」

と言った。

* * *

「『イルカのフリッパー』のサンディーは、金髪の素敵なお兄さんだったわねえ」と言うと、何と山形ではこれも放送されておらず、その代わり『名馬フリッカ』を放送していたという。

「輝けフリッカ。ほくの友達、オオ！ フリッカ」と、夫は大声を張り上げて歌った。

* * *

同じ年代を生きたのに、生きた場所によって、これだけ違う。

(一九九九年記)



憧れた人

憧れた人がいた。

結婚を夢みたものの、彼は長男だった。

悩んだ結果、万人の悩みを解決すると言われていた聖書を読んだ。神を信心していなかったもので、当然たくさんの疑問がわいた。大学ノートに疑

間を書きながら、読み進めた。

街を走る国道の向こうに教会があったので、質問に行った。

「聖書を、最初から最後まで読んだのですが、わからないことがあります。教えていただきたいです」

と言うと、この牧師は予想もしていなかった返事をした。

「僕は聖書を最初から最後まで読んだことがあります。わかる範囲で答えましょう」と。

私は耳を疑った。

そして、それで話が終わってしまった。小指で肩をトンと突けば、キリスト教信者になるほど聖書にのめり込んでいたのに。そして憧れもいつの間にか冷めた。

それから十年が過ぎたある日、昔憧れたその人が所属する男声合唱団のコンサートがあり、夫を誘った。

コンサートの最中に、

「二段目の列の右から○番目の人よ」

と言ってみた。

夫は、こう答えた。

「眼鏡を持って来なかつたからよく見えない」と。

完全に私の負けだ。憧れの人は、髭をはやした小太りの中年のおじさんになっていた。

(一九九九年記)



食事は楽しく

娘たちがそれぞれ下宿したので、夫と二人だけで食事をする。

何でも、好き嫌いなく食べていた夫が、

「まずい。それは嫌いだ」

「これは、味が濃すぎる。僕は、薄味が好きです」

などと言いだした。

「お父さんは、私たちと一緒に食べている時は、私たちに、好き嫌いをさせないために我慢して食べていたんだね。やっぱり、お父さんは、偉いね」と磨実が言った。年を取ってきて、ただ食の好みが変わっただけなのに。

夫と二人だけの食事の取り決めをした。

『家にいる時は、必ず一緒に食べる。』

食卓に出たおかずは、全て半分ずつ食べる。

話しながら楽しく食べよう。
ずっと一緒に食べよう』

(一九九九年記)



ワープロの訓練

ワープロ歴十五年のキャリアになった。

バシバシ音をたてて打つ。夫が、

「そんなに強く打たなくてもいいんですよ」と言う。

頭の中の文章が消えないうちに打っている。

最初は、なかなか打てなかった。一行打つのに一時間もかかった。

一ページ打てて、やれやれと思っても、保存の操作を間違えて、全部消えてしまった。苦労が水の泡となり、涙がこぼれた。

見かねた小学生の磨実が、

「お父さん、やってあげなよ」

と言ったが、夫は、やってくれなかった。

「やってあげるのは簡単だけど、自分でやらなければ勉強にならない」
と夫は言った。

簡単ならやってくれればいいのにと思い、また涙がこぼれた。

「これは、どうするの？」と聞くと、「説明書に書いてあるでしょう」。

「次は、どうするの？」

「前と同じだよ」

夫は、いじめているとしか思えない口ぶりで、そっけなくあしらった。
また涙がこぼれた。

涙をこぼしているうちに、どんどん上達した。

子ども会の行事予定表の作成をした。童謡の会の会報『虹のかけ橋』も百回となった。

神奈川新聞に、童謡の文章を連載した。『童謡を歌おう・神奈川の童謡33選』『童謡で遊ぼう』『満点ママ』三冊の本の著者となった。

「ほら、僕の指導がよかったからですよ。感謝をしてもらいたいですね」と夫が言った。

見守って、励ますだけの指導もある。ワープロが打てることは一生の宝なので、ありがたいと思った。

そして、もしかしたら、夫がいなくても生きられるのではないかとも思う。

(一九九九年記)



間違い

NHKの女性人気アナウンサーが、野球選手の名前やホームランの本数を間違えた。サッカーの得点や、相撲の決まり手を間違えたりもする。

夫に話すと、

「いいんですよ、間違えても。みんなの注目を集めるでしょう。あなたも『ここが違った、あそこが違った』と言えるほど覚えていたでしょう」

本当にそうだ。すらすらニュースが読まれていたら、さっさと忘れられて、こんな話題にならなかつただろう。

そのアナウンサーは、今朝も、はつらつと登場し、たくさん間違えて、最後にニッコリ笑って、スポーツニュースの時間は過ぎた。

(一九九九年記)

episode

ゴルフ場

新聞の一面記事に『除草剤にダイオキシン』と出た。

一九六〇年代から約三十年間使用された『クロルニトロフェン』だ。三年前、製造元の三井化学が、自主的に製造中止、回収したそうだ。この三十年の間、水田で、ゴルフ場で、いたる所で使用されていた。

結婚当初から、生物教師の夫は「僕はゴルフをしません。ゴルフ場は、除草剤で地球を汚染しています。ゴルフは人類の敵です」と、ずっと言い続けている。

箱根、伊豆、松田山にまで広いゴルフ場がある。大勢の人々がゴルフを楽しみ、そのお金で、除草剤がまかれ、きれいな芝生ができ、大地はダイ

オキシシンで汚染された。

(一九九九年七月七日記)



老 後

四十歳になった時、夫が言った。

「五十歳になったら、今までの仕事の成果を削りながら生きていくんだよ。実際に仕事ができる年齢は、五十歳までだね。目が悪くなって、集中力がなくなる。これからの十年間が勝負だね」

作詞家・なかにし礼氏の作品だけの歌謡曲の特集番組がNHKテレビであった。何千もの詩を書いて、大ヒット曲を生み出した彼は、もう詩を書かない。けれども、彼の曲は、歌われ続ける。彼は、若き日の仕事の成果

を削りながら、未知の未来を歩いていく。

私たちは、もうすぐ五十歳になる。あれから、どんな仕事ができただろう。成果をほとんど上げていないので、これまでの成果を削って生きていくことは不可能だ。これから生きていくのは、大変だと思う。

死んでしまうのは簡単だ。どんなに偉いことをした人でも、犯罪者でも、普通に生きた人でも、必ず死んでしまう。死ぬ順番が決まっていないから、未知の未来に向かって、みんなが生きる努力をする。

生きていくのは大変だ。時々、挫折者が出て自殺する。巻き添えをくって死亡する場合や、思いがけない犯罪に巻き込まれて死亡する事態に陥る人もいる。病死にはある程度の覚悟があるだろうが、突然の死は、やりきれない。

生きる努力を放棄して、怠けて暮らしたいという考えは、だれにでもあ
る。努力をおしまず、必死に生きても何も得られず、徒労に終わる場合も

ある。時代の流れ、運命、才能などが人と関わりを持つからだ。

『無知の涙』の著者、永山則夫。彼は自分を連続射殺魔と書いた本を残した。その文章の一字一句が胸に突き刺さる。

彼は何のために生まれて来たのか。彼の人生には、良いことが一つもなかった。彼の生きる努力が足りなかったのか。中卒労働者が、網走出身者が、みんな犯罪者か。

死刑が執行され、彼の人生は終わった。彼の罪を死刑という罰で償うのは簡単だ。もし、彼が生きてその罪を償うとしたら、どうすればよかったのだろうか。私には答えられない。

トルストイに『人はどれだけの土地が必要か』という童話がある。

神様の姿をした悪魔が、これまで一生懸命マジメに働いてきた農夫に囁く。

「日の出から、日の入りまで印をつけて囲い込んだ土地を全部お前にやろ

う」

農夫はそれまでになかった欲を出した。できるだけ遠くまで行き、シャベルで印をつけたが、もうすぐ日が沈む。農夫は必死で出発地点までもどろうとして走った。日が沈んだ時、やっと出発点にもどってきた農夫の息は切れた。悪魔はニヤリと笑い、農夫が持っていたシャベルで穴を掘って農夫を埋めた。農夫に必要な土地は、自分の棺桶の広さ、それだけでよかったのだ。

たいがいの方は、試行錯誤しつつ、ささやかな幸福あり、挫折ありの人生で終わる。そのささやかさが、むしろ大切だ。

神宮寺祥著『逆境の心理学・涙がかわくまで』（世界文化社）の一節が印象的だ。

「私たちは地球の間借り人にすぎない。」

私の心は急に軽くなった。

（一九九九年記）

5 どんどん丸くなる私

小百合。一九五一年（昭和二十六年）生まれ。
童謡の会主催。



趣味の時間は静かに

ラベンダーの畑に、

もんしろちょうが群がっている。

その中にいる私。

静かな、とっておきの時間。



ブタはきれい好き

私が小さかったころ、この町は減反政策で、養豚・養鶏の農家が増えていた。豚を飼っている家の前を通る時、子どもたちは鼻をつまんで、「くせえ、くせえ」と言いながら、ランドセルをカタカタ鳴らして通りすぎた。ある日、豚が売られて行くとの情報が流れた。近所の子どもたちが学校から帰ると、その農家に集まった。豚は、キーキー、キューキュー悲鳴をあげて、逃げ回っていた。一番太った豚がなかなか車に乗らなかつた。

鼻をつまみながら見ている子どもたちに、養豚農家のおじさんは、こう言った。

「豚は、本当は、きれい好きなんだよ。人間が汚くしているから臭いんだよ」。

しばらくして、だれかが、

「豚を殺しているところを見に行かないか」

と言い出した。

屠殺場は、歩いて一時間ぐらいの所にあつた。近所の子どもが、数人集まつた。大きい子も、小さい子もいた。みんな元気いっぱい、楽しく、歌を歌つたり、棒を振り回したりして歩いた。すぐに屠殺場についた。みんなは塀によじ登つて中を見た。私だけが登れなかつたので、中を見る事ができなかつた。私は、とても小さかつたのだ。

中を見た全員が、顔色を変えていた。気持ち悪そうで、今にも吐きそうだった。

夕暮れの道を、親に内緒で出てきた経緯もあり、誰ひとり話もせず、ぞろぞろ歩いて帰つた。

帰りが遅かつたので、それぞれの家で、それぞれに叱られた。

「豚は、本当は、きれいな好きなんだよ。人間が汚くしているから臭いんだよ」

この言葉は、それ以来ずっと心に残った。

時がどんどん過ぎた。

磨実の小学校の卒業式があった。私は母親として出席していた。町長の代理で、町会議員が演壇に立った。なんと養豚農家のおじさんは、町会議員になっていた。他の来賓の方々と同じように、長い祝辞を述べた。

しかし、それはまったく印象に残らなかった。私の娘たちにも、強烈なメッセージを披露してほしかった。

「豚は、臭い、汚い、太っていると馬鹿にされるけれど、本当は、きれいな好きなんだよ。人間が汚くしているから臭いんだよ。いじめ言葉に『ブタ』を出さないください。」

『ブタ』と、言われても決して自殺をしないでください。命を大切に、中

学に行っても、勉強に励み……」と言ってほしかった。

来賓の祝辞は、自分の言葉で、語ってほしかった。

高齢者は、若者に、すてきな言葉を残してほしい。財産や、家名ではなく、『心に響く言葉』を残してほしい。

(一九八七年)



いなくなった人たち

「今でも乞食っているの？」

「今は、いないと思うよ」

「でも、公園のベンチで寝ている人がいるでしょう」

「あの人たちは、乞食とは少し違うんだよ」

物がありあまり、社会福祉も整ってきている。だが、公園のベンチや路上に、うす汚れた男たちが、朝から寝転んでいる。

どうしたことなのだろう。

私が小学生だったころ、文久橋の下に男の乞食が住んでいた。

祖母は、ソバを作るのが得意だった。いつもできたてのソバを、乞食に御馳走した。乞食は、だまってソバをすすって、だまって茶碗を返し、おじぎをして帰った。

ミカンを十個ぐらいあげる時もあった。ミカンは肩から斜めにかけてズタ袋に入れてやった。やはり、だまっておじぎをした。

乞食の持っていたズタ袋を、今では、若者がみんな持ち歩いている。乞食のズタ袋が、粋なファッションになっている。

従姉妹の家で遊んでいる時にも、その乞食が来た。ごはん、梅干しを入れたおにぎりを、二つ作った。

「米より、炊いてあるほうがいいでしょう」と言つて渡すと、すぐに、食べ始めた。食べながらどこかに行つてしまつた。

私は、長い髪、汚い服装、どんよりした目におびえた。

「悪い事はしないよ」と、叔母は笑つた。

後日、警官が、連れて行つたと聞いた。それ依頼、私の家には、乞食が来なくなつた。

（「乞食」という言葉は、現在は使わなくなりました）

（一九八七年一月記）



買い物をする男

「世の中、変わったものだナア」と父が言う。

私が小学生のころは、父も母も教員だった。だから、父が買い物をし、母が帰って来て、食事の支度をした。男の人が、玉子や、魚、野菜を買っているのは、めずらしかった。

「じろじろ見られているようで、いやだったな。若くて、夢中で生きていたから、できたんだな」と父が言う。

三十年経った今、近所のマーケットでは、買物籠をさげた男の人たちが平気な顔で、両手にかかえきれないほど、食パンや、トマトを買い、ビニールの袋に詰めて、車で帰って行く。世の中、変わったものだ。

(一九八七年一月記)



家出と自殺

小学五年の時、家出を決意した。

両親は朝早く出勤し、夜はいつ帰るかわからない。両親は、みんなから慕われていたようだが、家庭をかえりみなかった。家族みんなで楽しく話をする余裕がなかった。祖母や親戚との折り合いも影響した。

私はこの親の子ではないんだと思えた。

そこで、パンツと歯ブラシを風呂敷に包んで家出の支度をした。行くあてはなかった。夜明け近くに、母の顔と自分の顔がそっくりだと気がついた。それで家出をやめにした。

中学二年の時、自殺をしようと思った。

だが、自殺の方法が、なかなかみつからなかった。そのまま鞆を持って学校へ行くと、学校中が騒然となっていた。

「○○先生が自殺した」

「ジャックナイフが胸に刺さっていた」

「ベッドが血の海だった」

など、口々に、見て来たかのように話していた。それで自殺をする意気がくじけた。

鹿川君がいじめにあつて自殺した事件がある。

テレビや新聞は、トップ記事で扱った。彼は中学二年生だった。彼は脅されて自転車を盗んだ。盗みを父親から責められたその日に自殺した。遺書には『僕が、もっと早く自殺しなかったのは、家族が優しくしてくれたからです』と書いている。

家族の優しさは一筋の光だった。父親に叱られて、彼の光は閉ざされ、

自殺した。

二〇〇〇年に二十歳になる子どもだった。大切な子どもだった。彼は、小学生に見えるほど背の小さい少年だった。

彼が死ぬ前に話したかった。彼の背中に手を置いて、長い時間をかけて話したかった。

「小柄でも生きる資格はあるのだ」と言ってやりたかった。

「ゆっくり生きていけばいいのだ」と言ってやりたかった。

たったそれだけの優しい言葉をかけてやる人が、彼の周りにはだれもいなかったのだろうか。

闇の中に彼は消え、すべてが終わった。

高校生になった私は変身した。その高校の、のんびりした校風が非常に気に入った。のびのびと自由だった。校長の影響が大きかったように思う。穏やかな校長だった。

(一九九九年記)



栗の木

御殿場線の線路わきにあった栗の木が切り倒された。誰が切ったのだろう。線路わきのこの場所には、まさか家は建たないだろうと誰もが思っていた。

昔、線路に立ち、我が家に向かって歌を歌った。近所のおばさんが、「レコードかと思ったよ」

と言った。

私は、小学生だったが、その一言は、ずっと覚えている。

私は音楽大学を卒業して、音楽の先生になった。

自分の生きた経験を活かして、子どもたちに心の支えになる言葉をかけ

たい。

たくさん思い出のつまった場所には、二階建ての家が三軒建った。

(一九九九年記)



母親

私が中学二年生になった年、母は二十年間勤めた小学校教員を退職した。最後の日に、中学生の男の子が一人訪ねて来た。

「僕が松田小学校の一年生の時、砂場で足をくじいて歩けなくなった。その時、先生がおぶってくれて、うれしかった。ありがとう」

と言った。自分で買って来たというショートケーキを一個差し出した。イチゴがのっていた。

母は、自分で食べずに、私に食べさせた。母は、きっとよい先生だったのだろう。この少年を育てたのだから。

(一九八七年一月記)



退院の日

一九六九年七月二十日。この日のことは鮮やかに覚えている。

私は高校の三年生だった。足柄上病院から退院して、タクシーで家に着くと家の中は騒然としていた。

「ただいま」

と言うと、全然知らないおばさんが出て来て、

「あんただれ？」

と聞いた。

私は、だれなのかな？

家の中では、見知らぬ人や近所の人々が、テレビを囲んでお茶を飲んで
いた。父も母も、娘の退院の日を忘れていた。みんなが私に気がついて、

「今日は小百合ちゃんが一番の特等席ね」

と言ってテレビの真ん前に座らされた。

テレビでは、今世紀最大のイベントが始まろうとしていた。

『アメリカのアポロ十一号月面着陸』だ。テレビ画面では、アームストロ
ング船長とオルドリン飛行士が月面を歩いた。アメリカの国旗は、無重力
のため、横に伸びたままはためくことはなかった。続いて、アームストロ
ング船長がテレビ画面に向かって手をふりながら一歩、二歩、スローモ
ーションで接近して来た。

みんなが感動した。この場面は、その後何度も放送された。

盲腸炎の手術の前に、母が娘は大丈夫かどうかを担当の医師に訊ねた。

「そんなことで新聞に出て、有名になりたくないです」

と、医師は笑って答えた。それは自信に満ちていた。

私は、背が高くてがっしりした体格のKという医師に、すぐに惚ほれた。

一時間と言われた手術は、三時間にもおよんだ。

(一九九九年記)



太 る

「太られたようですね」と、挨拶代りに言われる。

娘たちが高校生になった頃から言われるようになった。そのたびに、どんどん心が軽くなり、どんどん体重が増えた。

太るたびに、明るい未来が開けた。太るたびに、気楽に話ができ、歌声も、前よりどんどん明るくなった。

昔は、ウエストが五十六センチだった。毎日胃が痛くて『仁丹』を飲んで、我慢をしていた。いろいろな人間関係、世間体との戦い。

結婚二十年目から楽になってきた。時間の経過が、社会をどんどん動かした。自分も、社会も、どんどん動いた。そして、私は太った。

「みなさまこんにちは、池田小百合です。たくさん童謡を楽しく歌いたいと思います」

と、ステージの上からマイクで自分の姓が平気で言えるようになった。社会は、夫婦別姓の方向に急速に進んでいる。

長い長い時間は、過ぎた。

結婚は、本人同士が幸せなのが一番よい。

名前がどうだろうが、どこに住んでいようが、二人の前途を祝福しよう。

宇宙から見れば、地球はとるにたらない星にすぎない。

童謡を歌う。胸を張って歌う。ときどき、ボタンが弾け飛んで、仰天するようになった。オツと！ ボタンがない。

ラジオ番組『おしゃべりクラシック』で司会の渡辺徹さんのシャツのボタンが取れた。一曲流しているうちにつけられるかと思つて、スタッフに頼んだが、間に合わなかった。

「僕は今、上半身裸です。僕は、よくボタンが弾け飛ぶですよ。なんでもでしょうね。普通の人は、一生に一、二回でしょうけれど、僕は、他の人の十倍は、ボタンが弾け飛ぶんです。というわけでクラシックの番組の司会を、裸でやっています。ワッハッハ」

ペシペシと、上半身をたたいた。アシスタントの女の人が、笑いころげた。

「胸を張らないでください」

「それでは、次の曲です。襟を正して。アレ！ 襟がネエヤ！」

アシスタントの女の人は、笑って、次の曲の曲名が言えなくなった。

「ボタンつけは、放送が終わってからにすればよかったですね。何も、番組中にしなくてもよかったですね。失礼いたしました」

と、微さんが言った。渡辺徹さんと、その妻・榊原郁恵さんの家庭は、明るく、楽しく素敵だろうと思う。

(一九九九年記)



ウォークマン

ピアノ教室に、イヤホーンをしたまま入って来た三年生の子がいた。

「それ何？」

「ウォークマン」

「ちよつと見せて」

見れば、ただの小さなテープレコーダーだ。

イヤホーンを耳に当てると、ワーワー、ガーガー。すごい音が、耳に響いた。

「これ何の曲？」

「光ゲンジだよ」

「先生は、テレビで歌謡番組を見ないから、光ゲンジって見たことがないよ。シブガキ隊も、少年隊も、それに……」

「ウソ！」

「ウチの子は、あなたと同じ三年生だけど、歌謡番組を見ていないから、光ゲンジを知らないよ」

「……」

「歌謡曲の番組は、夜八時か、九時からでしょう？ あなたは、寝るの何

時？」

「十一時ごろ」

「他にも、カセットをたくさん持っているの？」

「ウン。おねえちゃんもウォークマン持っていて、外国人の歌手のを聞いている」

「おねえちゃんは中学生で、テストがあるでしょう？」

「聞きながら勉強しているよ」

さつき聞いた音が耳に残ったまま、ピアノのレッスンをした。吐きたい気分になった。

電車の中で、それは、補聴器に見えた。最初は、なんとかおいそうな学生さんなのだろうと思った。悠実も、中耳炎が悪化して、補聴器をつけて学校に行くかもしれないという不安な時期だった。ところが、電車に乗るたびに補聴器の若者が増え続け、リボンギヤルまでが、補聴器をつけて笑いこぼしている。

障害者と思っっている私には、とても異様な光景だった。それが、ウォー
クマンだとわかったのは、ずっと後のことだ。

その話を悠実と夫にすると、ふたりはあきれて顔を見合わせた。

(一九八七年十月記)



戦争を知らない子どもたち

「核兵器って何?」

「核戦争って何?」

「今でも戦争をしているの?」

「日本も、戦争になるの?」

「だれが戦争を始めるのだろうか?」

「原爆が、また落ちることがあるの？」

「お父さんは、戦争に行かないの？」

「核戦争が始まったら、地球はなくなるの？」

「戦争は、いやだね」

悠実も磨実も、真剣に反戦を口にする。どうしたのだろう。

聞いてみると、水木しげる原作の『ゲゲゲの鬼太郎』や、『悪魔くん』を読んでいたのだ。テレビタレントのタモリ氏が、「『ゲゲゲの鬼太郎』はいいよ。大人でもおもしろい。ためになるよ」と言っていた。

ホワイトハウスで、レーガン大統領と、ゴルバチョフ・ソ連書記長の会談が始まり、『INF（中距離核戦力）全廃条約』調印という、画期的なことが起きた。全廃されるミサイルの数が、十や二十ではないのに驚いてしまう。そして地球上にまだ、大小百万もの核兵器があるという。

なぜ、このような物を作ってしまったのだろう。今まで、よく平気で生かしていたものだと思う。「核があるから平和なのだ。軍需産業により高

度成長をし、豊かな日本になったのだ」と考える人が多いのは、困ったものだ。

私が小学校三年生の時、両親に日教組の日米安全保障条約改定反対デモに連れていかれた。松田駅前には鉢巻をし、プラカードを持った人々が集まった。演説や、シュプレヒコールを聞いて、私は、そのもののしさに縮み上がった。何か凄いことが起きているのだと思い、怖くて母の手にしがみついていた。

デモ行進中、オート三輪に乗った男数人が、棒を降り回し、何か大声で怒鳴ってデモを阻止しようとして、殴りあいになったりした。

『アンポ ハンタイ！』が、流行語になった。子どもも、わけもわからず、口々に言いながら、ジグザグ行進をして遊んだ。

その後、安保条約は、自動継続となり、人々から忘れ去られた。本当は、何につけても、この条約があるために日本は、いつまでもアメリカの支配下に置かれ、協力をさせられているのに。

小学五年の秋、父と、秋葉原の電気街にトランジスタラジオを買いに行った。ついでに東京タワーにも上った。東京タワーは、ただ高く、外を見てもビルばかりで、何も面白いことはなかった。何か買ってもらったのかもしれないが、ぜんぜん覚えていない。「東京は、すごいだろう」と、父が何度も言った。

帰りに、三人の白い服を着た人に出会った。一人は目が潰れ、足は義足で、アコーディオンを弾いて軍歌を歌っていた。一人は、片手がなく、鉄でできたCの字型の義手をしていた。もう一人は、両足がなく、むしろの上に座り込んでいた。頭には、カーキ色の帽子を被り、前に出された鍋にお金が入っていた。そこだけが、ぜんぜん別の空間だった。私がじっと見ていると、父は、手を引いて足ばやに通り過ぎ、

「戦争は、むごいな」と言った。

そして、七年後、もう一度同じ光景に出会った。高校の修学旅行の時。

九州の明るい南国の光の中に、突然、この光景が出て来たのだ。戦争で手や足を失った『傷痍軍人』だ。白い着物、義足、義手、アコーディオン、軍歌……私は、もう楽しい旅行どころではなかった。

戦争とは、いったい何なのだろう。戦争で死んだ人、傷ついた人は、何だったのだろうか。

被爆国として、もっと、日本中の人々が世界に向かって「反戦」「核の全廃」を訴えるべきだと思う。

(一九八七年十二月記)



終戦の日の記憶

テレビのアナウンサーが街頭で、若者にインタビューしていた。

「八月十五日は、何の日か知っていますか？」

二人の青年が答えた。

「知らない！」「わかんねえよ！」

次の二人の青年が答えた。

「海の日じゃないの？」「違うか？ あっ！ 原爆の日だったりして」

次に女の子の二人組が答えた。

茶髪、ピアス、サボ、ミニスカートのギャルだ。化粧もすごい。

「わかんない。何々、教えて、教えて」

「終戦記念日です」

「えっ。シューセン？ シューセンって何々？」

「戦争が終わった日です」

「あー。あのシューセンねえ」

「……」

私は、こんなふざけた番組を、放送しないでほしいと思った。

ピアノ教室に小学校二年生の女の子が来た。

「八月十五日は何の日か知っている？」

と、聞いてみた。

「知らない」

「学校で教えてもらわないの？」

「うん」

「お母さんは、何も話してなかった？」

「うん」

まだ、小さいからわからないのかな。小学生には、無理なのかな。

次にピアノ教室に小学校四年生の女の子が来た。

「八月十五日は何の日か知っている？」

と、聞いてみた。

「戦争に負けた日だよ」

「なぜ、知っているの」

「学校では、教わらない。おじいちゃんは、戦争の時の話はしない。いつも、お母さん、お父さんと、一緒にニュース番組を見る。ニュースでやるでしょう」

「あなたのウチは、すごいね」

青年が八月十五日が何の日か、「わからない」と言っていたテレビ番組について話した。すると、その番組をこの小学四年生の子も見ている、

「お姉さんの頭がすごかったよねえ。こんなで、こんなになって」と言った。

戦争については、語る人が少なくなってきた。

戦争を体験した人が、亡くなっていく。残った人々は、戦争体験を、命の尊さを、なぜ語らないのだろう。若い世代は、今が平和だから「どうでもいいよ、そんなこと。めんどろだよ」と思っている。これでいいのだろうか。

新聞・テレビのニュースは、子どもと一緒に見て話し合おう。世の中を知ることが、大切なことだ。

(一九九九年八月十五日記)



車椅子

駅の階段で、車椅子に乗った男性を、駅員さんが大勢で、上のプラットホームに運んでいた。

駅の階段は、だれが設計したのだろう。高齢者・障害者への配慮がまったくない。エレベーターがついている駅は、限られている。

カリフォルニアから帰国した娘が、

「アメリカは車椅子の社会で、ちよつと買物に行くのにも、車椅子でどこにでも行ける。バスも車椅子ですぐ乗れるし、道は平らで、車椅子だけが走る場所が確保してある。マーケットも、車椅子からでも手が届くところに商品が陳列してある。車椅子でも、みんな普通の生活だよ」と言った。

広大なカリフォルニアだからできることだろう。日本では、どうなるのだろうか。将来、私も車椅子で外出したら、大勢の乗客の注目を浴び、大勢の駅員さんに「セエノ」というかけ声と共に、持ち上げて運んでもらうのだろうか。

公共施設は、高齢者・障害者に、もっと配慮してほしい。

(一九九九年九月記)



ドナーカード

臓器を提供したいと思っている。

生まれてきて、一つぐらい他人のお役に立ちたいと思うのです。

真面目に考えています。

家族に相談をした。悠実も磨実も言った。

「母は、どこも悪いところがないから、全部やったらいい。遺族の私たちは、すぐ同意するから何も心配いらぬよ。ねえ、お父さん」

「そう、そう」

「……」

(一九九九年十月記)



子どもに言葉を

マーケットのレジで小学生の女の子がパン粉を一袋買っていた。

「お母さんのお使いができて偉いね」

と言ってほめてやろうかと思ったが、言いそびれた。

子どもだったころの私は、今の自分と同じ年齢のおばさんに、いろいろな場面で、たくさんのお話をかけてもらった記憶がある。

(一九九九年十月記)



つくしとスギナ

磨実が家の周りに生えているスギナを取って、束にして病院に持って行った。待合室のソファに座っていると、おじいさんやおばあさんが集まって来た。

「ソレは何だね?」

「スギナです」

「これがスギナってもの?」

「ツクシが大きくなるとスギナになるんだよ」

と、一人のおじいさんが言うのと、もう一人のおじいさんが、

「知らなかったね、ツクシがこんなになるんかい」

と、しきりに磨実の持っているスギナをさわって、ながめている。

私はお年寄りが、ツクシがスギナになるのを知らないので驚いた。

磨実は大勢の人の前なので、声も出さずにスギナを握りしめている。

ツクシがスギナになることも、フキノトウがフキに、青虫がモンシロチ

ヨウになることも知らない人は多いのかもしれない。

この町でも、ツクシや、フキノトウを見ることは珍しくなってきた。

小学生の時、タニシをバケツいっぱい取った。それを祖母がくださった煮にしてくれたことも、もう夢のような話だ。

(一九八七年四月二十四日記)

子育ては親の責任

核家族が進んでいる。

だが、まだまだ祖父母と同居の三世代家族は少なくない。

母親が仕事を持っている場合、祖父母が子どもの世話をしてくれるのは好都合だが、基本的には、自分の子は自分で育てよう。

たいがいの祖父母は、まず『子どもを泣かせたくない』と思っている。したがって、いやなことや面倒なことは子どもにさせず、甘くなる。

次に祖父母には『直接的な責任』がない。孫は、しよせん自分の子どもではないので、嫌われなければよいと考える。

さらに、両親と祖父母の『子育ての方針が食い違う』。

生きた時代が違うのだから、価値観も当然違うに決まっている。

私は、両親が教員で共働きだったために、叔母に預けられて育った。当時としては、珍しい『カギっ子』だった。叔母は物知りで、私にいろいろなことを教えてくれたし、従姉妹たちとは姉妹のように育った。『ひとりっ子』の教育には、このことはとてもよかった。

その時はそれでよかったが、大人になって、両親と同居していても他人のような関係からは、なかなか抜け出せない。叔母や従姉妹とは、わだかまりなく話せるのに。

近所のおばあさんが来て、次のような話をした。

「東京から来ていた孫が『このクソババアも、うるせえなあ。どこのババアも同じだ』と言ったので、おこづかいを渡して、ご機嫌を取って帰りましたよ。年を取ったら、お金を持っていないとだめだね」

私は、情けないと思った。

「おばあさんが、お元氣だからですよ」と慰めを言ったものの、その孫の親、つまり東京に嫁いだ娘を育てたのは、あなたである。孫に「クソババ

ア」と言わせているのは、母親となったあなたの娘さんだ。このような孫には育ってほしくない。

山形にいる夫の母親は、癌という難病と闘っている。孫に当たる悠実も、
磨実も、

「おばあちゃん。元気を出して、頑張って」
と、言葉をかけている。

(一九九九年八月記)



白い花の悲しみ

ハリエンジュの白い花が咲いた。見上げると、花の向こうには、青い空が広がり、きらきらと光が舞う。

次の日、川音川の土手の二本の木は、切り倒されていた。

突然のことで、呆然となった。

だれが切ったのだろうか。なぜ切ったのだろうか。

真新しい切り株に手を置いた。

河川敷にできた芝生の公園では、二十人ほどの高齢者ボランテニアが草むしりをしていた。そこには、いつもと変わらない日常があった。

私にはハリエンジュの白い花の悲しみが残った。

(一九九九年記)



御殿場線にSLを

静岡県の寸又峽すまたきょうをドライブした。途中、大井川鉄道大井川線の笹間渡ささまべ

駅に立ち寄ると、小さな無人駅に、かわいいベンチが並んでいた。乗客が五人集まったホームに、突然SLが煙を吐いて現われた。停車時間は三分ほどで、記念撮影をしている耳元で、悲鳴のような汽笛を一声あげて出発した。シューシュツ、ガツタンゴットン。遠ざかる蒸気機関車に向かって、興奮して両手を振った。

風は、石炭と石油の混じった昔の懐かしい匂いを吹きかけて通り過ぎた。まさか蒸気機関車に出合えると思っていなかったので、感動し涙が出そうになった。

子どものころ、御殿場線には蒸気機関車が走っていた。

そこで思った。日本のどこかに保存され、動かすことができる蒸気機関車を一日一往復走らせたらどうだろう。車内では、童謡『汽車ぼっぼ』のメロディーを流したら雰囲気は最高だ。車の時代になり利用者が激減し、さびれる一方の御殿場線に、もう一度、夢とロマンを走らせたい。車窓からは、田畑や、トンネル、鉄橋の、のどかな風景を楽しむこともできる。

山桜や、紅葉を眺めての「御殿場線SLの旅」をぜひ実現させていただきたい。

(神奈川県新聞二〇〇〇年三月二十四日 旅の思い出 掲載)



ゆっくり たっぷり

私のピアノ教室の生徒との会話。

「先生、こんにちは。今、何時？」

「どこかへ行くの？」

「そんなことない」

一曲弾いて

「今、何時？」

「急いでいるの？」

「そうじゃないけど」

「今、何時？」

と、どの子も聞く。

ピアノは、ゆっくり、のんびり、楽しく弾きたい。

「先生の時間をあげようか」

私には毎日、時間がたっぷりある。

(一九九九年記)



夢を飛ばす

『あしがら童謡の会はとぼっぽ』が、結成十年目となった。

青い空に白い鳩を飛ばす。それが夢だった。

小学生の時、秋の運動会で、お昼に鈴割りがあった。

割れると一斉に白い鳩が青い空に舞った。

白い鳩が群れをなして同じ方向に運動場の上を旋回した。

バサバサと羽の音が耳に残っている。みんなで白い鳩に手をふった。

鳩はキラキラ光って、秋の青い空に消えた。

鷹実が言った。

「サーカスのマジックの鳩は白いけれど、ほとんどの鳩は、ネズミ色に黒と茶色が混じった汚い色だよ。鳴き声も、くーくーで、はっきりしないし」

「エッ！」

「まさか鳩は、全部白いと思っていたの？」

「……」

(一九九九年十月記)



童謡を歌おう

童謡は、ゆつくり、のんびり楽しく歌いたい。

「年寄りには、年寄り同士で童謡を歌いましょう」

という、童謡の会に出合った。それでは、童謡は減んでいく。

童謡は、若い世代と高齢者と、みんなで歌っていきたい。

童謡の発声は、どうするか。

「母親からもらった声で歌う」

童謡は、いい声で歌おう。いい声の人と歌おう。

いい声は、好きな人の声。

世界に一人、あなたの声。私の声。

(一九九九年十月記)



童謡の歌詞の勘違い

作った人もびつくり、おもしろコーナー。

ラジオ番組『おしゃべりクラシック』で紹介された傑作と、童謡の会での傑作の例。

『赤い靴』

「異人さんに連れられて行っちゃった」を

「イ・イ・じ・い・さ・んに連れられて行っちゃった」

どこへ行くというのか？

『故郷』

「兎追いし かの山」を

「兎美味し かの山」

兎は、どんな味なのか？

『おぼろ月夜』

「田中の小路を たどる人も」

名前の田中さんと思ひ込んでいる人も多い。田中さんって、だれ？

『証城寺の狸囃子』

「おいらの友達や ぼんぼこぼんのぼん」を

「おいらの友達や ぼんぼこぼんのすつぼんぼん」

と、大声で歌えるなんて恥ずかしい。

『汽車ぼっぼ』

「畑も飛ぶ飛ぶ家も飛ぶ」を

「仏も飛ぶ飛ぶ」

仏が飛ぶなんて。

『肩たたき』

「お縁側には日がいっぱい」を

「応援側には日がいっぱい」

と、思い込んでいた人がいた。

『だんご3兄弟』

「だんごさん ちようだい」

これは、かわいらしい。

『どんぐりころころ』

「どんぐりころころ　どんぐりこ」

ドングリが池に落ちる音なので

「ドンブリコ」が正しい。「どんぐりこ」って一体なんだろう？

『歌の翼』

「豚の姿煮」は、似ている。もう、おかしくて歌えない。

『小さい秋みつけた』

「小さい足、小さい足、小さい足みつけた」

『げんこつ山のためきさん』

「げんこつ山のためきさん、おっぱい飲んでネンネして」を

「げんこつ山のためきさん、一杯飲んでネンネして」

げんこつ山のためきの赤ん坊は、お酒を一杯ひっかけて寝るのか？
それとも、歌っている人がお酒を一杯ひっかけて寝たいのか？

『森の熊さん』

「アラ熊さん お礼に歌いましょう」

「荒熊さん」ってだれ？

恐そうで一緒に歌いたくない。

『我は海の子』

「煙たなびく とまやこそ」を

「煙たなびく 富山こそ 我が懐かしき住家なれ」

この人は、きつと富山県人だ。

『蛙の笛』

「あの笛聞いてりゃ ト・ロ・ロ・ト・ロ・ト・眠くなる」
間違いに気づかないほど合っている。本当は、
「あの笛聞いてりゃ コロロコロコロ眠くなる」

(一九九九年記)



挨拶

テレビに、歌手の山本譲二さんが出演していた。

アナウンサーが「子育てのモットーは何ですか？」と、聞いた。

「こんにちは。さようなら。挨拶をしつかりすることですね」と、すぐ答えた。

私は最近、近所の人々に挨拶をしなくなった。正確には、挨拶ができな

なくなった。なぜなら、隣の家は、団地型のアパートだからだ。三階建てのアパートが四棟で、二百人以上の人が住んでいる。だれが、だれだかわからないから、挨拶をしないし、できない。

知っている人が、挨拶をしない場合がある。子どものこと、家庭のこと、夫婦のこと、仕事のことなど、精神的に落ち込んでいると挨拶ができない。挨拶が面倒になるのだ。

みんなで、気持ちの良い挨拶をしよう。

マーケットの駐車場で美容院の旦那さんに挨拶された。

「こんにちは」

たったその一言だけだったのに、私は、翌日シャンプーとカットに行つた。

(一九九九年十月記)



世界のオザワ

ホテルで日本経済新聞を配っていた。

アリオン音楽財団理事長・江戸京子さんの記事に釘づけとなった。

「世界に羽ばたく指揮者とピアニストのカップル。小沢征爾氏との結婚は、四年ほどで破たん。マスコミは性格の不一致と書き立てた。江戸京子さんは、公の席でピアノを弾くのをやめた」

知らなかつたので、驚くばかりだ。

「二人とも若過ぎて、本当に責任を持って行動できる大人ではなかつた。価値観も、家族関係も違っていた。結婚は、家と家との関係を見捨てられないもの、ということにも気づかなかつた。……様々な原因が重なって離婚

しました」

「結婚したのは世界のオザワをゼロから作り上げる時期だった。家でピアノの練習をすると『うるさい』の一言。ピアニストとして必要十分な練習ができなかった」

オザワの「うるさい」の声が新聞から聞こえた。

この記事は、江戸京子さんを取材し、京子さんの立場から書いてあるはずなのに、読めば読むほど離婚は正当だった気がした。互いの成功がそこにあるから、惨めではない。

私たち夫婦は二十三歳で結婚した。価値観も家族関係も違っていた。

私の両親は小学校の教員だった。熱心な日教組の組合員だった。夫の父親は警察官だった。真面目で優秀な警察官だった。夫は、高校の生物の教師で、私は、音楽の教師。私たちは結婚二十五年目になる。

(一九九九年十月記)



軍歌

九十五歳の老作曲家が、

「音楽は、リズムとメロディーとハーモニーから成り立っている。ハーモニーのない音楽なんて。僕は、嫌いで、ジンマシンが出ます」

と言って、ステージの上から、演歌や童謡をけなす。支援団体の婦人たちが拍手喝采する。

軍歌は、どうなのだろう。彼の作曲した『空の新兵』は代表作品だ。この曲に励まされて、多くの青年が死んでいった。若者の死は無駄死にだった。この曲のことは消しようがないはずなのに。

(一九九九年十月記)



かしわ哲さん

久しぶりに『NHKみんなのうた』を見た。

『まひるのほし』を、障害を持った子どもたちの集団が歌っている。
自分たちで叫ぶ。

「ああ見えたって、こう見えたって、どう見えたってOK！」

指導しているのは、シンガーソングライターのかしわ哲さん、四十八歳。
二十年前のNHKテレビ番組『おかあさんといっしょ』の歌のおにいさん
だ。大きな拍手を贈りたい。



島倉千代子さん

娘たちが小さかったころ、歌のお兄さんの哲っちゃんは、「すずめがサ
ンバ』『ちょんまげマーチ』『きみのなまえ』『おしゃべり機関車』『どんな
かお』などたくさんさんの楽しい曲を作って歌ってくれた。

「ありがとう」と言いたい。

そして、「これからも、がんばって」。

(一九九九年十月記)

テレビ番組『スタジオパーク』に歌手の島倉千代子さんが出演していた。
「あたくしも、包丁が使えれば、もう一度結婚をしたいです」と言った。

昔、ワイドショーの料理のコーナーにゲスト出演した島倉さんに、料理

の先生が、

「それじゃあ、お千代さんには、これを、こう切ってもらおうかな」

と言って包丁を渡した。すぐ、

「指を切っちゃったわ！」

と、島倉さんが叫んだ。

料理の先生はじめ、その場にいたスタッフ、カメラさん、司会者、見物が全員仰天し、一瞬シーンとなった。そして全員が慌てた。だけれが、絆創膏を指に巻いてやって、事件は一件落ち着いた。お千代さんは料理をしたことがなかった。お千代さんには、いつまでも、きれいな声で歌ってほしい。

前年の紅白歌合戦では、持ち歌の歌詞を忘れてしまった。

「あら、忘れちゃったわ！」で終わった。それでも人気は落ちることがない。



小川うたさん

新宿からロマンスカーに乗った。隣の席に素敵に年を重ねた御婦人が座った。

「私は小田原まで乗るんですよ」と、話しかけられた。

その婦人は、次々と、驚くことを話された。

「私は九十歳よ。十月で九十一歳になるの。作家、井上靖のいところです。嫁いで『小川うた』になりましたが、元の苗字は『月出』と書いて『ひたち』と読むんですよ」

彼女は、明治四十一年十月二十七日生まれ。井上靖の絶筆のコピーを持

っている。井上靖記念館に時々行くそうだ。

今日は、埼玉県入間郡のケアハウス光の丘から、三島市の娘さんの家に行くのだと言う。リュックを背負つての一人旅だ。

「長生きの秘訣は何ですか」
と、聞いてみた。

「歩くことです」
と、すぐ答えが返つて来た。

トランプが好きで、読書も好きだという。

「光の丘では、だれにも気兼ねをしないで気楽な生活よ。あと何年、生きられるかしら」

言葉がよどみなく出る。

「息子が、光の丘の庭に、バラを寄付して植えてくれたんですよ」
とうれしそうに話された。

小田原駅で握手をしてもらい別れた。

彼女は、若い人たちに混じって、乗り換えの改札を通って行った。
私は、この人に出会えて、はつらつとしたうれしい気分になった。

(一九九九年記)

あとがき

結婚二十五年で子育てが終わった。

楽しかった思い出が、現れては消えていく。そうだ、つかまえておこう。

ここまで書いていると、夫が来て言った。

「以前に、あなたが書いた原稿があります」

「えっ？」

書いた覚えがない。

フロップピーの原稿を読ませてもらった。

一九八七年一月から十二月まで、家族の生活を私が書いたものだった。

忘れていた楽しい日々が、よみがえってきた。みんなに聞いてほしいと思

ったのだろう。だから、書きとめてあったのだ。

磨実は、幼稚園を卒園して小学校の一年生になった時期。

悠実は、中耳炎が全快して、小学校の三年生になった時期。

私は、ピアノ教室の先生をしていて、まだ、童謡の会を主宰することなど考えていなかった。それは、「赤ちゃん時代の子育て」が終わり、「子ども時代の子育て」の真っ最中の年だった。

読み進めると、今の自分の考えとまったく違う部分があり、笑ってしまふ。

一貫しているのは「家族みんなで、楽しく食事をする事」だ。料理の苦手な私が、たったこれだけのことに、日々、悪戦苦闘している。

意外なことは、夫は子育てにほとんど関わっていないと思っていたのに、あらゆるところで、子育てに参加している。しかも、娘たちだけでなく、私にまで「先生」のような指導をしている。

偶然、一九八七年と、一九九九年の記録が生まれた。
十二年の時間の経過は、私を含めて家族を大きく成長させていた。

池田小百合

著者プロフィール

池田 小百合 (いけだ さゆり)

1951年生まれ。国立音楽大学卒。童謡研究家
「あしがら童謡の会はとぼっぼ」「童謡を歌う会玉手箱」
「童謡を歌う会赤い鳥」「童謡を歌う会青い鳥」
などの童謡を歌う会を指導
著書「童謡を歌おう・神奈川の童謡33選」センチュリー出版
「童謡で遊ぼう」夢工房
「満点ママ」夢工房
*本書は「満点ママ」を改稿したものです

お話し大好き 家族の時間

2001年11月15日 初版第1刷発行

著者 池田小百合

発行者 瓜谷 網延

発行所 株式会社 文芸社

〒112-0004 東京都文京区後楽2-23-12

電話 03-3814-1177 (代表)

03-3814-2455 (営業)

振替 00190-8-728265

印刷所 株式会社 フクイン

©Sayuri Ikeda 2001 Printed in Japan

JASRAC 出 0111201-101

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-8355-2629-5 C0095